PAL NEWS 2011/10 パル動物病院

～人と動物の絆～

よりよい関係を目指して

私たちは最先端の診療技術を生かし、地域に密着した動物病院を目標にしております。

診療時間

●裾野センター病院

月～土　午前 9：00 ～ 12：00
　　午後 2：00 ～ 9：00
日・祝　午前 9：00 ～ 12：00
　　午後 2：00 ～ 7：00

●沼津病院

平日　午前 9：00 ～ 12：00
　　午後 2：00 ～ 7：00
日　午前 9：00 ～ 12：00
祝・木曜日休診

お問合せ

・裾野センター病院
〒 410-1123
静岡県裾野市伊豆島田 843-5
TEL: 055-993-3135

・沼津病院
〒 410-0058
静岡県沼津市沼北町 1 丁目 5-27
TEL: 055-922-6255

・ウェブサイト
http://pal-ah.jp

愛犬の食事

今回は動物の生活の中で最も重要な食事について、お話しいたします。今では人と共存しているかわいい犬たちも、元はオオカミから派生した動物であり、狩りをする肉食動物です。そのため鋭い歯、強い顎を持ち、丸呑みした肉を消化できるほど丈夫な消化器官を持っています。しかし、肉さえ与えておけば良いということはありません。タンパク質、脂肪、炭水化物の三大栄養素に加え、ビタミン、ミネラルなどが必要です。

犬にとって特に重要な栄養素はタンパク質です。タンパク質は、筋肉、各臓器、皮膚、毛、腱、爪など細胞や組織を構成する以外にも、遺伝子や酵素、ホルモン、免疫体など、成長・維持・繁殖・回復といった生命維持に必須な栄養素です。犬が一日に必要なタンパク質は、成犬で体重 1kg あたり 4.8g。人間の約 4 倍です。

脂肪は、エネルギー源としての働き以外にも、嗜好性や食感を決定する重要な成分です。犬が一日に必要とする脂肪は、成犬で体重 1kg あたり 1.1g。人間よりやや少ない値です。脂肪は摂りすぎないようにしましょう。

炭水化物は、糖質と食物繊維で構成された栄養素です。炭水化物を中心に作られているフードを食べていると、余剰なエネルギーが脂肪として蓄積されて太りやすくなる傾向があるので注意しましょう。

ビタミン・ミネラルで重要なのはビタミン D とカルシウムです。カルシウムを吸収するためには、ビタミン D が必要です。ビタミン D は日光浴によって合成されるので、健康を保つために日光浴は欠かせません。

子犬は成長が早いため、必要な栄養素が成犬と異なります。特に離乳期が終わる 2 ヵ月齢あたりでは、骨の成長がピークを過ぎ、筋肉の成長が中心になり、必要とする栄養バランスが大きく変わります。バランスのとれた食事を心がけてください。

しかし、このようにバランスのとれた食事を毎日手作りするのはかなり大変です。高度な知識と手間が必要となります。犬との心の絆を深める「心の栄養」として、時々作ってあげるくらいが良いかもしれません。

栄養的なバランスや手軽さを考えると、やはり市販、もしくは病院で購入できるドックフードがおすすめです。選ぶ際には、以下のポイントに注意しましょう。

- ライフステージ、ライフスタイルに適しているか
- 総合栄養食であり、AAFCO(米国飼料検査官協会) の栄養基準を満たしているか
- 原材料表示がはっきりしてい るか
- 代謝可能エネルギー量が記載されているか
- どのような添加物が使われているか
- 賞味期限は切れていないか

食べ物は、運動とともに体を形作っていく大切な要素です。犬は自分で食事の管理ができません。そのため、飼い主が意識してしっかりと犬の食生活を管理する必要があります。

参考文献
トリマーのためのベーシック獣医学(ペットライフ社)
子犬の選び方・飼いかた・しつけ方 (池田書店)

今月の専門科診療

今月は下記の日程で専門科の診察を行います。ご希望の方は事前にご予約ください。
(カッコ内はカレンダー内の省略形です)

◆歯科（歯）
歯学博士 奥田 綾子 先生

◆エキゾチックペット（エキゾ）
エキゾチックペットクリニック
霍野（つるの） 晋吉 先生

◆腫瘍科（腫瘍）
麻布大学獣医学部附属動物病院
川村 裕子 先生

◆画像診断科（画）
獣医学博士 小野 晋 先生

◆問題行動治療科（行）
獣医学博士 吉川（きつかわ） 綾 先生

◆眼科（眼）
獣医学博士 当院：小野 啓

月	火	水	木	金	土	日
					1 眼	2
3	4	5 画・眼	6 歯	7	8 眼	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19 行・眼	20	21	22 眼	23
24	25 腫瘍	26 画・眼	27 エキゾ	28	29 眼	30
31						

てんかん

てんかんは、脳内に異常な電気的な興奮が起こり、突然全身のけいれんや意識障害を引き起こす病気です。慢性の脳の病気であり、てんかん発作は繰り返し起こります。一般的に犬で発生が多く、猫では比較的まれです（犬の発生率はおおよそ２％、猫で 0.5%以下）。

症状

てんかんの特徴的な症状は、全身の筋が突っ張るような強直性のけいれん発作です。この際意識を失うことが多く、よだれ、失禁などもけいれんと同時によくみられます。このような全身性の発作の多くは1～2分程度で収まります。しかし、５分以上続いても収まらない場合は、非常に危険な状態のため、すぐに病院に連れて来てください。その他に、発作の前兆として、落ち着きがなくなる、物陰に隠れようとする、震えるなどの症状が見られることがあります。

傾向および素因

てんかんの発症は、生後６ヵ月から３歳齢の間に起こるのが多いです。発作の間隔は数週間～数ヵ月と定期的に再発することが多いのですが、年をとるにつれて、頻度と重度が増す傾向にあります。ほぼすべての品種において散発的に認められますが、いくつかの品種では遺伝性が証明されており、ビーグル、シェットランド・シープドッグ、ゴールデン・レトリーバーなどが好発犬種として挙げられます。

診断

中毒、腎・肝疾患等の代謝性疾患、水頭症・脳腫瘍等の脳の疾患など、てんかんと同様な症状を起こす疾患は数多くあります。てんかんと診断するためには、これらの疾患がないことを様々な検査で確認していく必要があります。ただし、頭蓋内疾患について正確な診断を求めるためには麻酔下での画像診断（MRI、CT）が必要となり、時間、費用、動物への負担が大きくなってしまいます。そのため、問診、身体検査、血液検査や神経学的検査など、異常が認められないことを確認し、てんかんと暫定診断をして治療に入ることもあります。

治療

治療には抗てんかん薬を用います。 1～2分程度の発作が月に複数回起こるようなら、経口薬で治療していきます。もし来院時に５分以上の発作が持続している場合は、直ちにそれを止める必要があるため、静脈経由の注射で治療を開始します。また、短い単発の発作が1回起きただけであり、発作後の神経症状も認められなければ投薬は開始せずに、経過を観察するだけのこともあります。抗てんかん薬によりけいれん発作を完全に押さえ込むことはできませんが、発生頻度を減らし、激しい発作を防ぐことが可能になります。ただし、てんかんは完治する病気ではないため、基本的に投薬は一生続けていく必要があります。

てんかんは完全に直すことが難しい病気ではありますが、抗てんかん薬を使用し、上手に症状をコントロールできれば、生活の質を落とすことなく暮らすことも十分に可能です。

参考文献

スモールアニマル・インターナルメディスン
イヌ・ネコ家庭動物の医学大百科（PIE BOOKS）

ANIMAL HOSPITAL